

夕

イトルの「社会を希望で満たす働きかた」を見て、最初は社会福祉に関連する著書であると想像できなかった。これまでの障害者福祉の制度やサービス実践の著書はたくさんあり、私も仕事柄この種のさまざまな本にふれてきたが、アーティストという側面から障害のある人をとらえ、書かれている著書に、私自身初めて出会った。非常に刺激のかつ斬新な内容であり、読み応えのある著書である。

初めにソーシャルデザインという仕事について書かれているが、「社会的課題」を「希望」に変えることであるという明確な意思に基づき取り組む著者の強い姿勢が感じられた。また、デザイナーの仕事や仕事を辞して、社会福祉法人をつくり、公的な資金を活用した、障害のあるアーティストが集う「デザイン事務所」アトリエ・インカーブを機能させた経緯など、興

味深く拝読した。

私はこれまでも多くの社会福祉法人を見てきたが、芸術活動に特色をもつ社会福祉法人は、いくつもあった。ただ、障害者の生活支援や就労支援から派生したところがほとんどで、障害者の集うデザイン事務所をつくろうと意図して立ちあげた社会福祉法人はこれまでほぼ聞いたことがなかった。まさにこれまでの福祉の枠組みや固定観念を超越した発想である。

著者は障害者の作品に尊厳を認めないのはなぜかという点にふれ、「障がい者であり、ソーシャルデザイナーである私」の個人的なこの疑問と怒りが、インカーブ誕生の原点であると述べている。ソーシャルデザインという仕事や、障害者の社会参加の障壁を払い、「デザインの力で社会を変えていく」起爆剤になるであろう。社会福祉法人制度の性質や役割にもふれている。そのなかで社会

福祉法人にこだわる理由として、障害は個人的レベルではいかんともしがたく、「不可避性」「不可逆性」「普遍性」を確実に備えるものは公的な支援がなければならず、ゆえに公の支配のもとで社会福祉・慈善事業を行う公益団体＝社会福祉法人が事業を行うことにこだわらなければならない。同じ社会福祉法人で障害者支援に携わる者としては強く共感した。

後半の社会福祉の市場化の限界の記述では、企業等が無計画に事業をスタートし頓挫させるケースにふれている。公共性と公平な理念を堅持するためにも、社会的に期待される事業を社会福祉法人が担う必要性を述べており、その使命や存在意義を再認識した。社会福祉実践者はぜひ一読願いたい著書である。

社会を希望で満たす働きかた —ソーシャルデザインという仕事

今中 博之 著
発行／朝日新聞出版
☎ 03-5540-7793
定価／本体 1,600 円（税別）

評者 久木元司（社会福祉法人常盤会理事長）

社会を
希望で
満たす
働きかた

Imanaka Hiroshi
今中 博之

ソーシャルデザイン
という仕事

朝日新聞出版